

最上町の let's Challenge !

Vol.5

夢中にさせてくれたスポーツに出会う

全国の舞台を 目指して

おおは まなほ
大場 愛歩 さん

18歳 赤倉地区

平成17年生まれ。新庄東高等学校。陸上競技部元主将。高校総体陸上競技 種目「やり投(600g)」東北大会2位、全国大会21位【高校3年生時の成績】。趣味は音楽鑑賞。好きな言葉は「ありがとう」。理由：感謝の言葉を一言で表せる素敵な言葉だから。



陸上競技の「やり投」で、全国大会を目指して奮闘した高校生の大場愛歩さん。大場さんは、元々小学2年から中学3年まで野球をしていました。「野球も陸上も、やり始めたのは全て兄の影響」。中学3年生まで「やり投」という種目に触れたことがなかった大場さんは、高校の体験入学でその種目と運命的に出会った。「野球とは違った難しさがあつた。フィールドに槍が刺さらない悔しさは今でも覚えています。でも、刺さった時の喜びは感動的でした。その時にこの種目を高校でしてみたいと思ったんです。」

新庄東高校へ入学後、本格的に陸上競技へ打ち込みました。高校1年生では東北大会への出場は逃したものの、2年生では県大会で優勝し、満を持して東北大会へ出場。全国大会の出場をかけて挑んだ東北大会では惜しくも全国大会出場を逃しました。

2年生の秋からは、練習方法にも工夫を凝らしたと語ります。やり投げ以外の陸上競技の練習も取り入れたそう。ハンマー投げの練習や短距離選手との合同練習、また、他校の指導者からもアドバイスを

をもらうなど、積極的に競技力向上に尽くしました。

3年生で迎えた県大会では、秋の練習の成果が発揮され、他を圧倒するほどの記録を出し優勝。今年こそは全国高校総体で勝負したいと思ったそうです。東北大会もその実力を発揮し準優勝。しかし、全国大会出場の権利を掴んでも大場さんは満足出来なかったそうです。「東北大会で投げた3回の槍は安定感にかけていました。全国大会の前までに自分の悪い癖を直す練習に取り組みました。」と喜びよりも反省を語る厳しさ。



▲インターハイでの競技中の写真

その全国大会では入賞には届きませんでした。特訓の成果もあり、初出場ながら自分のできる最大のパフォーマンスが出来たそうです。

大場さんにとって「やり投」とはどんなものか聞いてみると「夢中になって頑張れたスポーツ。もっともっと自分を高めていきたいと思える大切なもの。」また、「大学でも大好きな陸上を続けたいと思っています。将来は地元で働きたいから、陸上競技を含めスポーツの楽しさを教えられるような指導者を目指したい。」と笑顔で話してくれました。自分に厳しく、将来を真つすぐ見つめる大場さんの、今後の活躍を期待しています。

